

総合討論

松嶋が松本の書いたエピソードを読んで、祖父母のところへ電話をしたくなったという以前の体験を語ったことに対する山本（前橋国際大学）の質問からスタート¹⁾。

「言葉によって拓かれる現象」と「心理学者のオリジナリティ」

○山本登志哉（前橋国際大学）

小説を読んだり詩を読んだりしても、それこそちょっとまた家に電話したいなあって思うときもありますね。その話と松本さんの話とが一緒なのか違うのか、そこがちょっとよく分からない。

○松嶋

どうなのでしょうね。なんか現象としては一緒のような気がします。

○松本

山本さん、小説の書いてある言葉とか、もしくは詩の言葉とかというのは、例えば僕がここで仮におばあちゃんとの大事な体験を示すために踊ったとします。その感じを踊ってみますみたいな感じで。踊ったことと詩を読むことと、踊ったものを見たり、もしくは一緒に踊ってみるとか、みんなが。それと詩を読むということというのは山本さんの中で違うことなんですか。

○山本

伝わり方がやっぱり違うと思う。踊りというのは本当に身体の動きがダイレクトにこ

1) 主催者が録音ボタンを押し忘れ、序盤の議論が録れていないため、ディスカッションの途中からになります。

ちらに来るじゃないですか。読むというのは、ワンクッションありますよね。自分の中で世界を立ち上げていくプロセスだから、ちょっと間接化しますよね。

○松嶋

ただ、小説とか詩とかとの区別をおっしゃったんですけれども、そういう話、昔からありますよね。ジャーナリストじゃいけないのかとかいう話ね。うん、そうやな〜っと思ってですね。

○山本

なんでジャーナリストにならないのかという。

○松嶋

ね〜、雇ってくれない (笑)。

○村上幸史 (大阪大学)

僕が昔その話をどなたかにしたときに、ジャーナリストとの棲み分けは、研究者はモデルを作ってという話を聞いたことがあるんです。

○松嶋

多分僕はそれを聞きながら、違和感があったと思うんですけどね。

○村上

だからモデルを作るということは概念が、こういうものがこの概念だよと当てはめて、概念を聞くと逆にその概念を見ただけで、言語ですか、それがイメージされる。伝わっているものは多分同じではなくて、微妙にずれている気がするんですけど。ジャーナリストの場合は概念提示するわけではないんですよ。その辺がちょっと僕は違うかなと思うんですけど。どっちがいいかどうかというのは僕はちょっと分からないですね。

○松嶋

僕の理論的な立場から言えば、ジャーナリストか研究者かを分けているのは分けている人で、別に僕はどっちでもいいわけですよ。

○山本

ちょっとそれは微妙だな。

○松嶋

というのも、僕は心理学を辞めたのかと真剣な顔をして聞かれた過去があって、「エ〜ッ!」と言ってしまったんですが、だから僕のやっていることは社会学だと言う人もいるし、社会学の人が社会学の人より社会学っぽいと言われてたりとかして、ちょっと微

妙な感じがしてるんですけど。でも、僕自身は心理学だと強く主張しているんです。別に根拠はないんですけど。

だから社会学か心理学かを決めているのも結構外的な枠組みというか、思い込みのようなところもあって、だから僕がやっていることが心理学として通用するというか、僕が一応、臨床心理学の講師を雇うとって採用された人がやっている研究なので、まあ心理学と言ってもいいのかという、それぐらいのことじゃないかと思っているんです、僕は。

○山本

でも、それってちょっと操作的定義みたいな。

○松嶋

だからそこに持って行くしか、もうないんじゃないかな。

○松本

でも松嶋さんの中で、例えば研究領域とかというのを持ち出すのがいいのか分からないけど、そこに何か寄与しているというときの、多少意識してめがけているというのが臨床心理学ということじゃないの。それが社会学、確かに派生的にそういうことが出てくるかもしれないけど、自分としてはそこに何か新しい、臨床心理学分野に新しいこととか何か寄与するものを提示しようというか、してるという気持、したい気持があって、だから自分が心理学なり臨床心理学者であるというか、それをやっているという意識があるのではないのかなと思います。

○松嶋

まあ、そうですね。誰に応答したいかと言ったら、やっぱり僕が入ってきたときに、割と心の中を深く分析するのが・・・というふうなことを言った人たちに対して、何かもうちょっとそうじゃないやり方もあるということを言いたくて、反抗期みたいな感じでしたけど。

○山本

ということは、つまり対話の相手としていわゆる心理学者というものを想定しているということですか。

○松嶋

最初はそうでした。最初はというか、今でもそうですね。

○荒川

科学的に言えば、多分、誰を引用するかと誰から引用されるかというので、ジャーナリストなのか研究者なのかと分かれるんだろうけど、だから松嶋さんの論文もジャーナリストだけが取り上げていたら、ジャーナリストのある部分の素と言われるのかもしれない。

○松嶋

しかも僕の論文は法学の人が一番引用してるらしくて。

○荒川

そのうち法学の研究者と呼ばれる日が来るかも。

○松嶋

いや、ないと思うけど。(その論文には)「心理学者がやってる」と書いてあるから。

分かること, 書くこと, そして伝えること

○徳田 (司会)

ちょっといいですか。多分私の中では関連しているんですけども、私自身がお三方の研究を見るときに、さっきコメントでも何人か言われたんですけど、私はやや停滞というか、キーワードとすると「どう割り切っていこうかな」というところもあるんですね。それはやっぱり意味の問題があって、どなたかが先ほど、これは私が見たい意味なんじゃないかとか、書くということにどんな意味があるのかとか、それは引いて言えば研究者として自分が書くとか伝えるという言葉にすごく過度に重きを置いているのかなとかいろいろ思うんですけども。なかなかやっぱり相手がいて、実際に生きている人の所に行って、私の場合はインタビューなので言葉をもらってくるんですけども、それに対して自分がどう対応するかとか、やっぱり使わせてもらうという感じがあるんですね。

そのときに松本さんは、「こうとしか思えない」っておっしゃって、私もそこに向かって行っているところってあると思うんですね。これだったら伝えられるとか、これだったら自分が責任をもって届けられるみたいなところを何となく探しているんですけど

ども、一方でそこがドツボにはまっていくようなところもあるのかなと思って。

それで最初の話に戻るんですけど、お三方の論文を見ると、途上であるというか、まだ理解できてないところもあるけれども、その当時は思っていないかもしれないですけども、途上であるけれども出して、その時点での見方というのをある種肯定して出しているというイメージがあるんですね。それを続けながら転がっているというか、前に進んでいるというイメージがあって、この場ではっきりと「理解できるものではない」と言えるというのは、1つの割り切りと言ったら変なんですけれども、そういうふうに見えて、それが本当にそう思っているかどうかというのではなくて、研究を進めていくというか、プロセスの中でとても大事というか、最初から持っているものかもしれないし、何かプロセスで行き着いたものかもしれないくて、そのあたりをちょっと聞かせていただきたいなと思います。

○松本

じゃあ僕から。これは転がり続けるということと多分関連してくると思うんですけど。僕の指導教官であった南先生という方がいますが、その南先生の副指導教官だった、確かカプランさんという人がいるらしいんです。僕はお会いしたことないんですけど、彼は結構有名な理論心理学者だったらしいんですけれども、死ぬ前によく1冊本を書いたそうです。退官前だったかな。その本というのは、本文自体はページ1枚程度で、あと全部脚注らしいんですよ。何か言わんとするときに、いやこうとも言えるこうとも言えるとか、これはこういうことを言わなきゃいけないって感じで、永遠にそういうことを考えていって、退官間際によく本を1冊書いたという話を聞きました。

先ほど、僕の育った研究室の中で結構まだ留まっているというか、何と言いましたっけ、「潜伏中の人がいる」という話をしたんですけど、ちょっと理想論っぽい話ですけど、僕は「研究」というのを「学問」と言うようにできるだけしているんです。ちょっと青臭い話ですけど。基本的に、僕は学ぶ、問うことというのは常に続いていくというか、なかなか片づけられない。例えば僕は結婚していますが、どうやって嫁さんとうまくやっていけるだろうみたいなことは、今日は良くて明日は駄目だったりしますよね。そういう形で永遠に続いていくもののような気がするんですよ。

それで潜伏期にいる先輩方というのは、どうも「まあここでよしとしよう」という形で片づけられない。論文に書くことが本当に正しいことなのか、それは何か自分の思い上がりじゃないかとか、大切なものを逃してしまうことになるんじゃないかとか、そう

いうことを僕から見ればすごく真剣に考えている方たちで、僕はそこの影響を受けているので、何か言い切ったり、もしくは「僕は分かりました」みたいなことをなかなか言いつらい、そういうところが正直あります。

それともう1つ、どう転がるのかという話に関してですけど、さっきカプランさんという方の話をしたんですけど、この前原稿に書こうとして書くのを止めた僕にとっての大きな体験があって・・・僕は高齢者の研究をしていますけど、書こうとした体験というのは高齢者と付き合っているときの体験じゃなくて、映画を見ていたときの体験なんです。

ニール・ヤングという人を知っています？またロックの話になってすいませんけど。アメリカのニール・ヤング&クレイジーホースという、以前バッファロー・スプリングフィールドというバンドをやっていた人なんですけど。ニール・ヤングという人がいて、彼はクレイジーホースというバンドと30年ぐらい一緒にやってるんですね。その映画自体はお互いが、ニール・ヤングは「バンドのメンバーはいつでもクビにできるんだよ」と言って、バンドのメンバーは「ニール・ヤングは俺たちがいないとやれないさ」みたいな、そういう本当にどうでもいい話をしているわけです。それが2時間延々と続いて、僕もつまなくて寝ちゃったんです、途中で。

起きたらラストの場面で、ニール・ヤングの「ライク・ア・ハリケーン」という有名な曲があって、その曲をデビュー当時と25年経った今とをオーバーラップさせながらというか、どっちかが前面に出て、どっちかが背景にきて、それを交互に繰り返す場面だったんですよ。それまで寝ていた僕は起きて、ずうずうしいんですけど泣いちゃったんですよ。思わず大泣きして、そのとき観客が2人しかいない白昼の映画館で1人泣いているという・・・さっきまで寝てたのに・・・という本当にお恥ずかしい話ですけど、本当に泣いてしまって・・・あれはなんだったんだろうというふうにずっと考えていて、いまだにそれに対する返答が出ないんです。

唯一言えることは、時間が重なることの不思議さというか、「ライク・ア・ハリケーン」の曲をやる彼らというのは以前に比べて下手になってるんですね、年を取って。でも、どっちが良い悪いじゃなくて、何かもう比べようのないものだなというのが僕の中ですごくあって、年を取るということというのが何か比べようがないものとして捉えられるんじゃないかなということを今考えているんですけど。

それで転がり続けるというのは、直線上でここまで行ったとか、今はここで埋まっち

やったとかという話ですと、どうもしんどくなる感じがするんですけど。僕の中では「死ぬまで書けませんでした」と言われると「ちょっと何か書けばよかったね」とちょっと言いたくなりますけど、死ぬまでに何か書ければいいじゃないかなというぐらいの感じで・・・正直そんな感じで。

○荒川

「愚鈍じゃない」という話とはどうつながるんですか。愚鈍じゃないとやっていけないという。

○松本

そこに対する思考が浅いということだと僕は思っているんです。

○荒川

それと潜伏期間脱出とのかかわりというか。

○松本

僕の場合はおそらく、家庭をもって子どもが生まれたという事情が大きかったのかもしれない。生活のために）書かないとやっていけないというところが大きかったように思います。家族を持つという選択肢を取ることも、自分の非常に正直な感受性がある意味、一旦置いとくわけですから、そういうところも含んでいると思います。

○参加者 A

さっき、そうとしか思えないという言葉が出てきたと思うんですけど、そこがすごく、割り切るというか、ある種の割り切りとかここでとりあえずこのような理解の仕方ととりあえずいこうということですよ。

○松本

はい。近いけどちょっと違う。

○参加者 A

それを支えているのは何ですか。

○松本

そうですね、ありがとうございます。今のニール・ヤングの話も関係あるんですけど。僕は時間をかけるのはすごく大事だと思っていて。例えば僕はよく結婚の話を持ち出んですけど。生活ってやっぱり僕の場合は今一番それが重要ですから。嫁さんとやっている、嫁さんは僕の知らない僕の癖とか嫌なところとこー良いところというのをえらい知っているわけです。なおかつ隠し持っていたりするわけです、それを。ある時にぶつけようと

思って、「あんたはこうなのよ」って感じで。いわゆる他者ですよ、嫁さんというのは。それが僕のことを、ある意味僕以上に知っているところがある。もちろん僕の隠しているところもありますよ。でも知っているところがあるというのは、なんとなくですけど、ずっと生活をする中である時「この人はこういう癖を持っている」とか「こういう嫌なところを持ってる」というところがかなり確信的に掴めるんだと思うんですよね・・・これは例え話ですけど。

僕も高齢者と付き合っていると、「この人はこういうときにすごく寂しがるな」とか「このことをすごく大事にしているな」ということが、正直家族から指摘されても「いや、彼はそうなんだ」というふうに答えたくるような、・・・これはちょっと問題があるところなんですけど・・・なんかそれぐらいの感じで掴めるという感覚があるんですよ。

そういう意味で割り切りの話じゃないですけど、「本当にそうなの」ということを繰り返していけば確かに終わらない問いなのかもしれませんが、でも「本当にそうなの」と問わずとも、「確かにそうだ」というふうに思えることというのはあるんじゃないのかなと思う。そのときに、さっき書くタイミングという話も今日出てましたけど、そのときが書くタイミングじゃないのかなとは思っています。

○参加者 A

研究者だからというところとやっぱりつながってくる。私の理解の仕方が正しいものを正しい・・・そうとしか思えないと思っているものが価値があるのかということで悩まれていることとか出てきて、そういうことだと思うんですけど。何かそういうところと絡んでるんだと思うんです。実感として分かった、こうとしか思えないということと、またそれは書いて意味があることなんだろうかとかって、またちょっと別な問題なのかなという気もするんです。

それが松嶋さんがおっしゃった「読み手を意識する」というところとつながってくると。なんかちょっと自分の意見があるとかそういうことではなくて、それぞれのトピックがどう関連しているのかという、わからなくなりかけたときに。

○徳田 (司会)

ちょうど松嶋さん、書くということと連動していると思うんですよね。個人的なニーズとしては行きづまりをどう考えるかというのもあるんですけど、多分現象というか、理解する相手がいて、そことの関係での何か理解とか了解性と、また今度それを読み手

というか伝えるといったときの了解性というか、2つの話が多分あって。

そして松本さんの今の、そうとしか思えないというのはどっちのほうかな。どっちと区別するわけでないんですけど、そのあたりと書くということって、最初見ることと書くことというのはすごく重要だとおっしゃっていたので、何かあればと思いますけど。どうなんでしょうね。

あと、分からない部分ってどうするんですかと、さっき「積極的な受動性」とおっしゃってたんですけど、分からなさって書くときにどう処理しているのか。あるいは書くときには、基本的には分かっているというもので突っ走ってしまうのかというか、後で分からなさを・・・

○松嶋

分からないものは書けないですかね。

○徳田（司会）

分からなさは書けない。

○大倉

分からないと書きます。

○司会

分からないと書きますか。

○参加者 B

「積極的な受動性」にちょっと補足をしとくと、分かるというよりも、分かろうとしているというような感じなのかなと。今そこでお話ししていたのを聞いてそう感じて。例えば私も妻がいますので、妻がいる水準でお話を聞いていると冷や汗が出てくるぐらいのリアリティがあって、そうじゃなくてまだ妻帯者じゃない若い方たちは、想像の世界で同じような笑みを浮かべる、これもある種の質ですよ。

それで、さっき言いました積極的な受動性を持っている、受動的な積極性を持っているという、それ自体は分かろうとするスタンスとか立場、態度というような形で出てきている。それについてちょっとコメントをいただきたいなと思います。

○松嶋

僕は松本さんが言う鈍感というか、愚鈍というものもあるかなとも思うんですけど。ある先生が言ったことが僕の中では割といいなと思ってて、それは要するに、「今この時点まではベストを尽くすけど、明日にはどうなっているか分からないというのが研究者

なのよ」というふうなことをその方はおっしゃっていて、僕もそれだなと思ってて。出すまではいろいろあれこれ心配になってするんですけど、出しちゃったらとりあえずその時点でのことだから、相手に読まれて何らかの返事が返って来るということを待つしかないのかなと思ったりしています。

あと、僕自身が卒論生なんかによく言うのは「とにかく書け」ということで、外に出せということです。これも人から聞いたことなんですけど、外に出せば自分の悩みというのはみんなに突っ込んでもらえる。だけど自分が悩んで書かなければ、ずっと君だけが悩むだけだから、とにかく何でもいいから出せと。出したら出したことは客観的にあることだから、それに対してみんなが突っ込むこともできるし、手助けしてあげることもできる。だからレポート1行でもいいから書いてくれば、それを議論できるんですけど、それができなくて悶々と悩むということだと僕たちは見守っているしかないから、とにかく何でもいいから書いてきなさいということは言ってて、それは僕の論文を書くスタンスとも通じているのかなと思います。

○大倉

同じですね。僕もやっぱり行きづまってる時に書くというか、これは難しいですけど、例えば去年1年間、僕は質的研究の方法論だけで書いたんです。なんでかという、事例では書けなかったから、事例では行きづまっていたから。

要するに、なんかいかにも転がり続けて格好良いみたいな言い方を（徳田さんに）されてますけど、多分僕もずるずると引っ張られる割合のほうが多くて、毎日毎日学生と会ったりとかしているだけなんですけれども、その中でやっぱりなかなかまとまらないんですよ。どうにもならん。でも、お茶を濁して質的研究の方法論とかをぐだぐだ書いているうちに、ある日突然というか、ある学生とのエピソードを書いたんですけれども、その時何が起こったかという、なんか知らないけど僕が持っていた＜他の場＞の何とかとか、そこら辺の概念装置であるとか、あるいは先行研究であるとか、そうしたものと引き比べたときに、それに対して何かインパクトを与えるような、それを覆したりするような意味を持つ事例かなというのに、ふと出会うということがあったんですね。結局、それはエピソードとしてまとめることができた。

あるいは『拡散』という本だったら、僕は分からない部分というのは必ずどの研究にも残すようにしていて、というのもむしろ人のことは分からんだろう、そう簡単にと。分かることは大事にしたいけど、分からんだろうということで、必ず「逃がす」という

ことをしているんです。「この人は結局分からなかった」みたいな形で最後終わるのが結構好きなんです。

そのときに、でも、じゃあなんでそれで書くのかというと、やっぱりこれを、例えば須賀くんの世界をできるだけ、風景とか気分とかを追っていく中で、統合イメージってありますよね、要するにアイデンティティというのは様々なバラバラなものを統合して1個の人格、しっかりとした大人になっていくんだと、そういったイメージで考えられていたアイデンティティというものに対して、明らかに違う流れというのが須賀くんの風景というものを追っていく中で出てきた。それとの対比の中で初めて、これは研究としていけるぞ、まだ分からない部分もあるけれども研究としてまとまるぞといった手応え。だからそういう出会いというのはやっぱり必要なんじゃないですかね。

それはただボーッとしているだけじゃなくて、何とかまとめようとしている中で、ある日ふと向こうからやって来るみたいなのところがあるんじゃないかなと。

さっきのジャーナリズムとの違いなんかもやっぱりあって、心理学だったら先行研究との兼ね合いでの意味を持つ言説ですね、これがはけるかどうかというのは、やっぱり大きいんじゃないかな。

○松嶋

行きづまったときは友だちがいることが大事ですね。友だちとか先輩とか。僕も行きづまった頃があってというか。この中に知っている人もいるでしょうけど。行きづまっていたときに、僕は名大だったので、名大のここから出たところに昔は中華料理屋があって、そこで先輩と「こんなことをしていいんですかね」みたいなことを言ったら、「いいんだよ」と言って。その先輩は僕より4つぐらい年上だったので、先輩が「僕より4つも学年が下だから、僕が没落するのを見てから宗旨替えしてもいいんじゃない」って言うてくれて、それですごく楽になった。

それからあと僕は学内ではあまり理解者がいなくて、学会で飲み会をしたりとかいうことが結構元気になっていたらしく、学会で僕の顔を見たある先生が、「松嶋くんってほんと学会だと生き生きしてるよね」と言うてくれて、「よっぽど嫌なんだね」って言うてくれたことがあって、「そうですか」となったんですけど、そういう身近な聞き手、自分のことを聞いて、「あ、そうか」と言うてくれるような人とか、何か出せる場があるというのはいいのかななんて思います。

○大倉

ちょうど良い機会だと思うので、質感のほうのイメージがまだもうひとつ分かりにくいということだったので、そこについてちょっとお話ししようかと思ったんですが、今の話と関連させて言えば、まず書いてみると。まず書いて、エピソードを自分なりにまとめて書いてみると、びっくりするんですよ、あまりの伝わらなさに。自分ではこういうことはこういうことだと思って書くんだけど、周りが全然理解してくれない。何だろうと考えると、そこにやっぱり自分は捉えてたけれども周りには伝わってない質感というのがあるんだな、ということがそこで分かる。それも1つ質感というものを対象化して、主題化して意識化していくためにすごく重要な作業だなというふうに、そういった意味でもアウトプットを出すというのは非常に重要だなと。

質感というものが、すごく現象にありありと、雰囲気として、「ある」みたいなイメージで捉えられると非常に困るんですが、これはよく誤解されるんですが、本当に最初はすごくかすかな感覚だったりするんです。例えば、僕が先ほど言った大学生とのやりとりのエピソードを書いたときにまずあったのは何かというと、その学生があまり成績がよろしくないということで担当だった僕が呼び出して、いろいろ「説教」をするんじゃないくて「相談」する。「どうする？」というような相談をする。それで一生懸命言葉を出して、「このあとこうなっちゃうね、こうなっちゃうね、どう思ってる、どう考える？」と言ったときに、その学生から「別に何も考えてないですけどね」って言われたんです。

そのときに笑顔が引きつるような感じですね。その後、事例は動いていきますね。「いや、まあそうは言うけど」とか言って、それで最後は喧嘩になっちゃうんですけど。そういうエピソードが終わった後、呆然として「ああ、何だこれは」と思って。そのときに僕がまず描きたいなと持ったのは、その笑顔が引きつる感覚だったんですね。すごくわずかな、かすかなその感覚というのは、いったい何だったのか。その質感をなんとか読者に伝えるためにはどういった前提をいっぱい書かなきゃいけないか、どういった文脈を盛り込まなきゃいけないかといったことからどんどん発展させていく。

質感、だから必ず現場に出ていると感じているものがあるはずなんです。そしてそれはびんびん感じるものではなくて、なんとなく感じているもの、なんとなく分かっているもの。エピソードを書いてみて出したら、それを周りはほとんど分かってないということに気付いたのはすごく大きかったんです。

自分が共有していない過去の経験の質感をどうやって描くのかといった話もありましたけれども。まず僕だったら「何だ、この分からなさ」は」という、その分からないという質感をまず丁寧に描写することから始めるかなと。「この分からなさって何なんだろう」「分からないという感じ」「全然付いていけない」「なんか取り残されたような感じ」とか。

○松本

いいですか？大倉さんの今の話にあえて返すと、僕は、大倉さんが何かかすかな気付きに・・・僕は、大倉さんのことを「そこに突っ込んでいく」とよく表現するんだけど・・・その「突っ込んでいく」という大倉さんの在り方と、僕の場合はどうか・・・僕の周りにはそういう人が多いんですけど・・・そういうことに確かに日頃多少感づいているのかもしれないけど、それをなんとなくやり過ごして、それを時間を経ることによって「こういうことだったのか」と、かなり身を任せるというか、格好良く言えば「機が熟すのを待つ」というか、そういうスタンスがあるんですね。

そこに突っ込んでいくというやり方もあるけど、さっきの「霧心」という話じゃないけど、ぼんやりと抱えていくというか、こういうことも気になったり、こういうことも気になったり、こういうことも気になったりしているんだけど、ぼんやりと抱えながらある時「これを書ける」とか、「これを今書いたほうがいいかな」とか、書けたらいいけど周りには書けない人が多かったりという、そういうあり方みたいなものもあるんじゃないのかなと思っていますね。

○大倉

それは全然あると思いますけどね、本当に。僕が突っ込んでいっているように見えるのは何なんだろう？

○松本

どう思いますか、松嶋さん。そう見えませんか。大倉さんはストレートばかり投げているイメージがある。

○松嶋

それはそういう時を見てるからじゃないの。突っ込んでるときをね。やっぱり突っ込むときはありますよね、こうだとわかったときは。

○大倉

うん、そうですね。やっぱりなんかいけそうだとするときは突っ込みますよ。

○松嶋

だからそういうときに行き会ってるんじゃないの。聞してる？

○松本

ハハハ (笑)。いや、でもこれは蛇足ですからいいですけど、大倉さんはいつもストレートだなと。飲んでるときも、なんかそんな感じで、僕を問い詰めるみたいな。「松本くん、分かってんの!？」みたいな感じかなと。

フィールドにおいて「私」に訪れた経験を＜私＞が書くことについて

○徳田 (司会)

質感とか、さっき内的感覚と言ったら、「僕は言っていないけど」って言ってたんで、そのあたりを少し。

○松嶋

質感は、僕は言っていないで、どういう感覚かなというのはちょっとまだ分からないのですが。だから質感というよりも、さっきの大倉さんの言うことにちょっと触発されて・・・自分の立場からしか書くことができないから、何か正しい書き方があるわけじゃないので自分を経由しないと、どんな迂回路であっても要するにフィールドとの関係の取り方みたいな話で何人かの先生からお話があったと思うんですけど。ケアマネジャーとかでも相談されちゃっている暇がないみたいなこととか、英語のことをやられてて、実践者のほうがプロだからということで、それで私はどういうスタンスでということとかというの、僕はそういう立場だからこそ見えることというのがあると思うから、そこからしか書いていけないし、何か正しい書き方というのがあるわけでもない。ただ、書いた後で、同じことを書くんだったらこっちのほうが効率が良かったねということは事後的にあるかもしれないけど、自分で書いていくときにはそれしかないんだから、そう書いていくしかないのかと思っているのです。

フィールドでのあり方というの、自分をどういうふうに遇してくれるかということがフィールドの特徴をよく捉えているようなときもあるかなと思って、今日のスライドではフィールドエントリーを飛ばしましたけれども、更生施設というところは結構不思議

議なとこで、現場では割と受け入れて研究者にいろんなことを調べて発信してもらうみたいな意識はあるのに、保護観察官の人とか偉いさんの人は、どこから情報が漏れるかわからないから駄目だということで許可しないみたいなことがあって。だから僕がどういうふうに入っていくかということも、相手がどんな反応をするかということから自分が何者としてそのフィールドに捉えられているかということが分かったりする。

だから結構フィールドに入るのが難しいんだと思っていたんですけども、それが例えば学校の先生にインタビューするということがあるときは、学校の先生って知り合いの学校の先生の紹介だといとも簡単に、そこまで信頼してもいいのかというほどしゃべってくれたりして。実は昔は、みたいなことまでしゃべって、後からあれはちょっとやばかったねと言われてたりとか、そういうこともあったりして、だからどういう情報が引き出せるかということも、どういう関係でつながったかということと切り離して考えられない。自分がどういうふうに入っていったかなということも、自分がどういうふうに出されたかということから類推できるようなところもあるんじゃないかなと思っています。

逆に、正しい入り方があると思っていると、自分がどういうふうな立場で入って行って、何者として見られているかみたいなことに結構無頓着になっちゃうようなところもあるのかなと思っています。

だから本当だったらこの場にいるはずなのかどうかしらんけど、宮内先生という人がいて、『体験と経験のフィールドワーク』という本を出されているんですけど、その方がフィールドワーカーというのは若いうちが旬みたいなことを言ってるんですね。年寄ったりとか偉いさんになっちゃうとフィールドワーカーというのは寿命が来るんだみたいなことを書かれているんです。

おっしゃりたいことは分からんでもないんですけども、僕は寿命はないと思っています、というのはどういう立場で入っていくかということに正解はないから、常に自分が何者かとして入って行って、その中から見えてくることを書いているんだから、僕が偉くなれば偉くなったような遇され方をされるだろうし、そこで普通だったら多分語られているはずだろうけれど自分には全然言われなことがあるなという感じがしたりとか、それに気付くのが大変か易しいかということはあるかもしれないけど、そういうことに気付いていけば、そういうことがないと多分質的な研究というかフィールドワークってできないと思うので・・・というようなことを思っていました。

○徳田（司会）

ちょうど、もう1つ残されていたフィールドとの距離というところと今つながってきているので。つなげてくださったのだとは思いますが、そのあたりでその場に、さっきオープン度みたいな話も出ましたけれども、フィールドに作られていく自分というの、作られていくというか、形を成していくという自分もあるというふうにおっしゃっていたんですけど、そういうプロセスも含めて何かフロアの方でもいいですし、フィールドというところでちょっと話をしたらどうかなと思います。

○松本

松嶋さんは比較的・・・僕の言葉で言えば相対化して・・・必ずしも若い時の要するに初学者風にしていく場合と偉くなっていく場合と、それぞれその時の相手の遇し方というか、それを記述していくなり、もしくはそれに対する理解をちゃんと提示していけば、特別どちらがどうということはないじゃないかという話をしたと思うんです。それに対して僕は、宮内さん松嶋さんと両方とも分かるなと思いながら聞いていました。確か松嶋さんが書いていたと思うんですけど、フィールドのそこでのあり方みたいなこと、入っていき方それ自体を記述すると。僕はそこは確かに必要な気もするんだけど、でもそれを書いたところで何なんだろうというところもあるんです。それで何を保証しようとしているんだろうと。

例えば僕は前・・・確か実験社会心理学研究だったと思うんですけど・・・読んだ論文で、自分はこのフィールドに600時間いたとかということを書いてあって「何だこれは」と思った覚えがあるんです。ちょっと松嶋さんとズレるのかもしれませんが・・・これも理想論っぽいですけど・・・僕の立場はエピソードなり解釈なり、そこで何か伝わるものとして、この人はここまでできてここまでできてないとか、こういう感じでここにいるんだなとかという形で、そこで何か実現するしかないんじゃないのかなというふうに思ってます。その軌跡自体をいくら書いたところで、それは何になるんだろうと。それはやっぱり保証しようとしているところがあるんじゃないのかなと。いわゆる確かしさとか、私はこんないい感じでいましたよと、そういうことを僕の直上の先輩なんですけど、自分がどう呼ばれるかということを示して、こういうふうに僕はラポールが取れましたみたいなことを書いていて、我が先輩ながらちょっと「何じゃこれは!？」と思ったんですけど。そういうことを証拠として出す感覚が、それは望ましいことなのかなというふうに思っているんですけど、どうでしょうか、そこら辺。本に軌跡を書く

みたいなことを確か書いていたので。

○松嶋

書いてましたね。距離の取り方とか軌跡を書くということと 600 時間というのはだいぶ違うと思う。600 時間というのは量で質を担保しようみたいなところがあって、要するに長いことってたほうが偉いねんみたいな話でしょ。だからそれは多分違うと思ってるのですよね。

ただ、僕があれを書いたのは、つまり僕を通してしか見えてこない現実だから、当然僕に見えないことは書かれていなくて、あるはずだけれども見えてないものは書かれていないのですよ、あの本の中には。

だから見えないものがどこなのかということを読者の人に知らせる手がかりがあるのがいいというのが1つの理由としてあって。もう1つは要するに自分の記述の文脈作りみたいなことをしたくて。

つまり質的研究をやる人なら大体分かってると思いますが、言葉って指標性というのがあって、どこに置かれるかによって意味が全く違うということがありますよね。同じ言葉でも。同じことを言っても、誰がどういう文脈でどんな歴史があって言ってるのかみたいなことというのがあるのと無いのとでは、その言葉の持っている意味は違うと思うし。

それは大倉さんが、僕は太倉さんの話はそういうふうに理解してるんですけど、要するに語り合い法の中で自分のすごい過去のことを持ち出されて延々と書かれるとかありますよね。ああいうのが、「(太倉論文は) 理解できない」って言われる所以だと思うんですけども。僕はああいうふうな意味のつながりの中でしかこの言葉は理解できないと思ったから多分書いてらっしゃると思ってて。自分がこう理解したんだということは、自分としてはこういう立場で入ってましたということを自分として他者に分かってもらうために、言葉だけよりは何かもっと言葉の文脈みたいなものを自分で少しは作ったほうがいいのかと思っていてという意味で書いている。

○参加者 C

鯨岡先生のエピソード記述というのには必ず書けと書いてあります。

○松本

書いてあります、別にそれだから何で。

○参加者 C

それって、人との関係性を最初に明らかにしなさいということですよ。フィールドに入った相手と自分の。

○大倉

松本さんがメタ観察嫌いなところと絡んでんじゃないの？

○松本

そうですね。2つあって、例えばさっきの600時間なんていうのは、自分のかわりを対象化してしまうというか、それ自体を対象化させて600時間、例えばこういう関係でこういうラポールを取りましたみたいな話をすることの問題性がまず1つあると思うんですよ。もう1つ、僕がさっきから言っているのは、自分のかわり、もしくはかわる中での自分の文脈、それからさっき言ったことを時間をおいて今どこまで書けるのかということもあるし、なおかつそれらを書くってどういうことだろうというところがちょっと僕の中でよく分からないというところですね。メタ観察はすごく関係あると思うんですけど。

○徳田(司会)

私もやっぱり3人の共通点でもあるんですけども、研究者としての自分を論文のどの段階で書くかというのでそれぞれ違うなと思ったんですね。大倉さんはご存じの方は今もお話に出ましたが、論文の中にそのままインタビューの解釈とかやり取りも含めて書かれていて。松嶋さんはこれからどうか分からないんですけど、本の中では最初に研究があって、その後である意味振り返るといって、何かタイムラグがあって、その文脈というのを出すということをやられていて。松本さんはご自身がおっしゃったように、その関係とか見えてきたもの、こうとしか思えないって。やっぱり「こうとしか思えない」と「こう思える」というのはちょっとレベルが違うのかなと思ったんですけども、こうとしか思えないというところで自分の関係のかかわり方とか見え方というものを伝えているような気がしたんですね。

だから興味があって。それが何だとかまとまりはしませんけれども、書くということと対象と自分のどこで出すとか、自分の伝える言葉というものをどれぐらいのものと捉えているかというのでちょっと違うのかなと。どこで出すかという。さっきの時間もありますよね。ボーッとしている時間もいいし、やり過ごすというか、時間経過の中で自分が見えてくるものというのを待っているというのと、書きながら見えていくという、

そのあたりはまとめる必要はありませんけど、それぞれのやり方というのがちょっとくつきり見えるところかなというふうに思いました。

○大倉

1 つ思うんですけど、松嶋さんの本に「問題のある少年と見せているのに役立っている」というような言い方が随所に出てくるんで、そうなんですけど、誰が「見てる」んだろうなということがいつも不思議だったんですよ、読んでいる間は。最後、松嶋さんなりに「実はそう見てたのは自分だったんだ」というか、そういった流れになって、だから結構（自分のことが直接記述に）出てない段階から実は自分の見方というのは暗に効いてると思うんですね。

僕だったら、「私」というのは前のほうの段階で既に入れ込んでいくなと。だって問題と見ているのはまさしく自分だから、僕だったら「私には問題があるよと感じられた」と。

○松本

どうですか、僕は松嶋さんに聞きたいんです。僕は松嶋さんの本は松嶋さんの比較的思考の歴史というか、それを正直に出したのかなという気がしたんですけど、あれを私の物語構成というか、私が構成してたんだ、私の関心によって構成したというのはかなり後で自覚してきたということなのかなというように僕は思っていますけど。

○松嶋

うん。私というのは、僕はその瞬間には自覚できないと思ってるんですよ。多分書こうと思えば大倉さんのように書くこともできるんだと思うんですが、あのときに書いたのは、要するに自分というのは自分は書くことはできないけど、自分の痕跡から自分がどう生きてきたのかを分かるみたいな話で書いたんですよ。そういうことです。

記述はデータであろうか？ : 記述と記述者の内的な関係について

○山本

言い方がうまく表現できるかよく分からないけど、例えば自分が書かれた事例とかいのがありますよね。それというのはある意味でデータという感じになるのかなの

かという部分、もしかしたら感覚の違いがあったりするかなと思ったりするんですけど、
どうでしょうか。

○松嶋

何がですか。

○山本

データ、自分が書いた事例とか何とかをデータという形で表現できるかどうか。

○松嶋

事例をですか、文章をですか。

○山本

文章で書かれた事例を。

○松嶋

自分の書いた文章をデータにできるかと。

○山本

データとして読めるか、エピソードとか。「これは私が提出したデータです」みたいな形の表現は可能か。

○松本

データと呼ぶかということ。大倉さんからどうぞ。

○大倉

僕はデータじゃないなと思いますね。やっぱり僕が表現したいのはあそこにあったものの、あくまで。書かれたものもそれを表現する1つの努力ではあるけれども、それ自体がデータではないです。ちょっと分かりにくいかな。要するに文章というかテキストとしてありますよね、僕が書いた事例というのが。このテキストがデータではない。このテキストが表現しようとしているあそこにあった事例というのと、いつも緊張感を保っていたい。このテキスト自体を1つのデータとしてしまうと、このテキストの中にその事例がすべて閉じこめられているというようなニュアンスになりませんか。「これがデータです、これを分析するんです」というのじゃなくて、僕はやっぱりこの書かれた文章、書いている文章で何か表現しようとしている、そこといつも緊張関係を保っていたいというのはあって、あんまりデータという言葉は好きではない。

○村上

さっきその話があったんですけど、結局、何かテキスト以外のもので同じようなもの

が想起されるのがあれば、それでいいということになるんでしょうか。

○大倉

絵とかですか。

○村上

まあそうですね。

○大倉

どなたかが絵を付けていましたが（笑）。

○村上

みんな共通して持ってるんですが、何かの手段でテキストより取り出すことはもしかしたら可能なのかもしれないなど。

○大倉

そうですね。ただ、難しいところがあって、何でもありというのもありっちゃありなんですけど、じゃあ絵だけになったらどうなのか。僕の研究はこの絵ですと言われると。やっぱり基本は文章なんじゃないですか、研究の場合は。

○山本

テキストという表現は、1 つはいろんな読み方ができるということですよ。今、背後にあるものとの緊張関係と言われたのは、つまりどうとでも読めるというふうには想定しないということも含んでいるわけですかね。

○大倉

やっぱりテキストというか、書いた事例というのが、表現したいものがやっぱり読者にも伝わって欲しいということですよ。どうとでも読める部分もあるけれども、どうとでも読んで欲しくない部分もある。自分が伝えたいことがあるし、それは伝わってほしいと思いますし、そこら辺は難しいですよ。

○山本

だから質感を表現したいというのはどうとでも読んでほしくはないわけです。

○大倉

そうですね、やっぱり。

○山本

やっぱり何かこのテキストの背後にあるものを伝えたいわけですよ。それをどう共有するかという努力なわけですよ。

○大倉

言葉の仕方（言語化の仕方）というのは人それぞれでいいと思うんですよ。ただ、前言語的なものとかいうのを、解釈の仕方は人それぞれでいいけど、その解釈の材料となるものはぜひそのままダイレクトに伝わって欲しいなという思いで書いています。

○山本

その質感というのは、解釈に先立って存在するものみたいな感じ？

○大倉

そう言っちゃうとまた語弊が。だってそれ（当該の質感が僕の解釈に先立って存在していたということ自体）が僕の解釈みたいな……。やっぱり僕との関係とは切り離せないものですが、ただ僕と事象との緊張関係の中で出てきたある質感というのは読者にそのまま伝わって欲しいという。「言葉以前のもの」という言い方が非常に危険だというのは分かるんですが。直感的に言って「言葉以前のもの」に類する何かというのは伝えたい。

○山本

それはやっぱり個性的な自分との緊張関係の中で現れてきたということは、一つ置くわけですね。

○大倉

そうですね、それは重要。「自分が」感じたこと。

○山本

だけど自分が感じたことというふうに語ることを通して、他者にもそれが伝わっていかんだろうというものがあるわけですね。

○大倉

そうです。そうです。

○参加者 D

研究としての物差しが自分自身にあって、それだからこそ内的な感覚はマニュアル化できないということがそこにつながると理解していいのですか。

○大倉

松本さんが言ったマニュアル化できないという話。

○松本

これは多分全然別次元の話を……。いや、でも関係あるかな、確かに。関係あると思

いますよ。

○参加者 D

質的研究って、結局は研究するその人自身の質が問われるのかなと、今ずっと話を聞いててそれを感じたんです。

○松本

いや、僕は大倉さんほど自分が好きじゃないので・・・今のは冗談ですけど（笑）。
今日本当はそういうスライドを作ってたんですけど、ちょっと理屈っぽいなと思って止めたんです。僕が書いたのは述語理論と主語理論というのがあって・・・松嶋さんが今日書いている「私のフィールド」と「フィールドとしての私」という書き方があります。
例えばさっきのデータと呼ぶのかという話にも関係するんですけど、僕もデータとは呼ばないんですけど、じゃあテキストと呼ぶかと、僕はそれも呼ばないし、何と言えбайいかちょっとよく分かんない。あまり名を付けるのが好きじゃないので。

ただ僕はある意味自分が好きなんでしょうけど、自分が書いた文章を読むとちょっと泣いちゃうんですよ。泣いちゃうというのは冗談ですけど、「この人いいこと書くな」と思うわけですよ。そこに自分が現れているというか、それを読むことによって自分がこういうことを考えているのかとか、自分がそこで現れてくるみたいなどころがある。

○松嶋

やっぱり自分が好きなんじゃない。

○松本

そうかもしれないけど、軸を自分に置くわけじゃなくて、むしろ描き出されたものというか、それに軸を置いて、そこに自分がまた現れてくるというような、なんかそういうどっちが先かと明確に言えないんだけど、どっちかというと僕は書いたものに軸を置いた中で現れてくるのかなと思っています。

その僕が書いたものを人がどうかは知らないけど、自分が読んでいいと思っちゃうということに関しては、その内的な関係については、何でそうなるのかというのは分からないんじゃないのかなと。もしくは人において僕が書いたものを「これ分かる」とかっということが仮に起こるならば、それがなぜ起こるのかというところは語り得ないことじゃないのかなと思っていますけどね。

○松嶋

僕は山本先生の問いかけの意味がいまいちはっきり分からなかったんですけども。

○山本

私にも分かってない。

○松嶋

ああ、そう (笑)。はい。

ボイスレコーダーの録音時間いっぱいになってしまって、録音はここまで。